
学園変獄

浮魚塩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園変獄

【Nコード】

N4627J

【作者名】

浮魚塩

【あらすじ】

屋上に呼び出された春樹。そこには女の子が居た。期待できるシチュエーション！だったのに、なぜか決闘を申し込まれる。

第1話（前書き）

別のでわりと真面目に書いているので、その対極のつもりで書いた。

更新はすごく遅くなる予定。
ごめんなさい。

第1話

春を運ぶにはまだ少し冷たい風が僕の上を吹き抜けていった。

夕焼けの空に浮かんだ雲は、まるで今の僕の浮わついた気持ちを代弁しているかのようだった。

今の状況は、これまでの人生で最高なシチュエーション。

放課後。

屋上。

女の子。

下駄箱に入っていたこの手紙。

もっ心臓がひっくり返りそうなくらい鼓動しているし、正直止まるんじゃないかと心配になるくらい働き続けている。

これが青春！

青い春と書いて青春！

意味なんて知らない。

でもなんかいいじゃない！

期待は膨らむ一方。僕は、いや、俺は（言い換えた意味はない）

！ 絶対にこのチャンスをもノにしたい次第であります！

だが…。

耳にした言葉は、僕の淡い期待など、一瞬で何処かへ消し飛ばしてしまふものだった。

「私は、あんたが、すごく気に食わないっ!!」
「へ？」

状況を理解しようにも、突拍子過ぎてスペックの低い僕の脳味噌はあっという間にフリーズしてしまったのだ。

「決闘しろ！」
「ど、どうして?!」
「問答無用！」

女の子が僕に向かって走ってくる。長い髪をフワリと揺らし彼女は跳んだ。

最初に見たのは白い布。次にそこから伸びた綺麗な足、そしてどこを踏んだのか分からない靴の裏。

最後に見たのはやっぱり白いぬ——。

飛び蹴りを顔面に受けたことを知ったのは、飛んだ意識が戻ったからのことだった。

第2話（前書き）

最初だけ連投。

第2話

日本人。

男。

普通の高校生。

好きな食べ物は鯖の味噌煮。

見た目も普通。

成績も普通。

運動神経も普通。

友達が多い方。

だと思っ

おおむら はるき
大村春樹。

僕にはそんな固有名詞がついている。

珍しくともなんともない普通の名前だ。

そんな僕を皆は親しみを込めて『タイソン』と呼ぶ。

某有名なあの方とは違う。

でも皆からはそんな風に思われていない。

かもしれない。

さて、そんな僕がなぜあんな状況に陥ってしまったのか。それから伝えていこうか。

それは春休みになる少し前。

僕には大きな転機が訪れた。

朝、下駄箱に入っていた白い封筒。

僕の偏った分析パターンを当てはめると、そこから導き出される答えは…。

「果たし状?!」

悲しいことにそれには心当たりがある。日々それに怯えて過ごしていた。なので真っ先に挙がった答えはそれだった。

中身を確認しようとして封筒を裏返すと、なんとも可愛らしいシールで開け口が止められていた。それによって導き出される可能性は。

「秘密組織からの手紙?!」

と口にして思わず苦笑いした。

さすがにそれはあり得ない。現実と虚構の区別くらいできる。僕は常識人。

じゃあ別の可能性は…。

「なんだ、ラブレターか?」

「うわっ!?!」

後から良介が覗いていた。

谷田良介。やた りようすけ成績は常に下位。だけど運動神経は抜群にいい。不良っぽい奴。

良介とは高校に入ってから仲。最初は取っつきにくかったけど、今ではいい友達だ。

「ラブレター?」

それって都市伝説じゃないの?

「これは興味深い事件だね」
「うわっ!？」

良介に氣をとられていると、下からニヨキツと陽太が現れる。
かたやま よつた

片山陽太。成績はいいけど、運動神経は人並みの眼鏡君。

陽太とは小学校の頃から遊んでいたのが腐れ縁でここまでやってきた。

氣心の知れた奴だ。

「人々に恐れられているタイソンにラブレターを出すなんて、どんなゴツ子だよ」

「開けてみてよ」

「間違いかもしれないんじゃない」

「それはないよ。ここにタイソン様へって書いてあるし」

封筒の片隅に小さな字で確かに書いてあった。タイソンというあだ名はわけあって学校のほぼ全員が知っている。

だけど、仮にラブレターだとして、あだ名の方でこういうものを書かれるのは、個人的にとっても悲しい心境で、つまりそれは本名の方が曖昧になっている証拠で、涙が出そうです、お母さん。

二人に促され、僕は仕方無くその封筒を開く。

中には一枚の手紙が入っていた。

それを見て僕たちは凍り付く。

『お話ししたいことがあります。詳しいことは放課後屋上で』

中身は呼び出し。内容も至って普通。

問題はそこじゃない。

書き方だ。

文字は鉛筆ものでも、はたまたボールペンのインクで書かれたものでも無い。

墨。

文字は墨を使い、筆で書かれたものだ。しかもただ書いたんじゃない。これでもかというくらい気合いがこもった文字で紙からはみ出さんばかりの勢いで墨を撒き散らしながら書かれていた。

これは、どう見ても果たし状的な何かではないのか？

「は、はは、なんだよこれ…」

良介が乾いた笑いで一步引く。

「はは、自分の名前を書き忘れるなんてあわてんぼさんなんだねー」

陽太が棒読みで言いながら一步引く。

「ちよっ！ 僕を見捨てないで！」

「HR始まるから急げよー」

逃げる二人を見送りながら僕は途方に暮れる。

右手に握られた手紙。

これ、どう見てもラブレターじゃない！ 果たし状でしょ！？
くそう、せっかく可愛い封筒でカモフラージュしていて、どうして中身がこれなんだよ！ 不意打ちにも騙し打ちにも使えないぞ！ せめてもっと期待させる！！ 責任者出てこい！ 出てこないなら片っ端から千切っては投げていくぞ！

と、心の中で頻り叫んだ後、僕は項垂れながら教室へ向かった。授業はまるつきり頭に入らなかった。

放課後の事で頭も僕もいっぱいいっぱい。

だけど、受け取った以上行かなければならないだろう。

逃げるという手もあるけど、果たし状だった場合、後のことを考えると怖い。

そして、もしかしてラブレター的なもの、もしくは単なる呼び出しだった場合。行かないのは相手に失礼である。

結果、どっちにしろ行った方がいいという答えが出ました。南無三。

こうして舞台は放課後の屋上へ。

ここで僕の下がっていたテンションはあつという間に跳ね上がる。だって、そこに居たのは女の子。

身長は僕より少し低い。ふわりとした長い髪の毛を風に揺らしながら、グラウンドを見下ろしていた。

「あの…」

なんと声をかけたらいいのか分からず、出た言葉はそれ。しかも緊張のせい、少し裏返っていた。

その声が届いたのか、女の子は振り返った。

風で長い髪が女の子の顔を隠す。それでも邪魔だとは思わなかった。

夕日に照らされたその姿は、見とれるほどに綺麗だった。

「タイソン…、さん？」

が、そのあだ名が現実へ呼び戻してくれた。

「う、うん…」

若干下がったテンションを隠しながら返事する。

「来てくれてありがとう」

「う、うん。それで、話って？」

早々に話を切り出す。

でないと一目惚れしちゃいます。

「あ、はい……」

暫しの気まずい沈黙。

そして女の子は口を開いた。

「あの、わ、私、あなたが、す……」

というところまで言って急停止。

「私は、あなたが、すうつ！」

また急停止。

「すつ、すすす、すつ、はあー……」

え、なんの呼吸法？

けれども、「す」ってなんだろう。「す」といえばその後の言葉は限られてくる。

可能性はあるのか、都市伝説は実在するのか！？

「私は、あなたが！」

夕焼けでもわかるぐらい顔を真っ赤にして、女の子は二度目の急
停止をした。

しかし、さっきまでとは少し様子が違う。
何かに驚いたような表情が伺えた。

「私は、あんたが、すごく気に食わないっ!!」

「へ？」

「決闘しろ!!」

そうしてあの場面へと続く。

これが『変』の始まり。

そして^{やぐわと}苺草兎卵子との出会いだった。

第3話（前書き）

ノリと勢いだけで書いてみたけど、どんな方向に行くんだ、これ…？

第3話

春休みは短いものだった。

あつという間に時間は過ぎて、もう始業式だ。今日から高校二年。この長い坂を上れば高校に着く。

そして、そこでまず待っているのはクラス替え。

そう。あの日から僕は一日たりともそれを欠かさなかった。僕を蹴り飛ばしたあの女生徒と一緒にのクラスになりませんように。信じてもいなかった神様に毎日祈った。

もしこの願いが届かなかったら僕は祈った日数分神様を殴ってやる。

そうそう。僕はその女生徒を一応調べた。

名前も知らず、ただ蹴られたというのは凄く腹が立ったから。

冴草兎卯子。

当時僕のクラスはA組。対して彼女はD組。同じ階の端と端のクラスだった。どうりで知らないわけだ。

だが、問題はそこじゃなくて、その冴草がとんでもない暴力女だということだ。三年の不良グループをたった一人で伸したらしい。まあ、正当防衛であつたらしいが。とにかくその不良グループのリーダー格であつた沢木という男子生徒が、冴草に目をつけてしつこく付きまとつたらしい。こう言うのは不服だが、実際冴草は美人だ。僕も一目惚れしてしまいそうだった。だからその沢木の行動も頷ける。しかし、沢木はやり過ぎた。強引に冴草に迫つたらしい。結果、ボコボコに伸されてしまったと…。

「うつ…」

治ったはずなのに頭が痛む。だが僕は、いや、俺は負けないぞ！と、意気込んでみたのだが…。

クラス分けを見て愕然とした。
自分の名前と、もうひとつ。あつてはならない名前。

冴草兎卯子。

マイガッ！

神よ！ 覚悟しておけ！ 今からテメエをぶん殴りに行つてやる！
いいか、例えその道に如何なる困難があろうともすべて捻り潰して貴様の下に辿り着いてやる！

「よおつ、タイソン。今年も同じクラスだな」

後ろから良介が出現。肩を組んでそう言う。

「あ、そうなんだ」

冴草のところばかり目がいって見えてなかったよ。

「その様子じゃ、僕も同じクラスだということを見落としてそうだね」

「陽太もか！ やったね！」

知り合いが居ると随分と未来が明るく見えるもんだ。こりゃ今年も楽しくなりそうだな。

って…

んなわけねーだろ！！

「つつかさ、俺らの名前見ないでどこ見てたわけ？」

「確かにスカートからのびる女の子の足は気になるけど、そんなところばかり見てちゃダメだぞ春樹！ はっはっは」

このエロ眼鏡。

「違うよ。あそこ見ろって…」

掲示板に張り出されているクラス分けの表を指差す。

「汚草ってあるだろ？ 僕を蹴り飛ばした奴だ。あんな兎の皮を被った暴力女と同じクラスなんて最悪さ。もう、未来が見えないね。悪魔、いや、もう魔神ぐらいなレベルだよ……。って、あれ？」

良介と陽太がなぜか距離をおいて冷めた笑顔を浮かべている。身ぶり手振りジェスチャーで何か伝えようとしているようだけれど、分かるわけないだろそんなタコ踊りで。

「悪かったわね、暴力女の魔神で」

「ふえ？」

後ろを振り返ると同時に僕の横を風が掠める。
そこにはチェックのスカートを揺らしている冴草の姿。
一瞬で何があったか全然分からなかったぞ。

「つち…」

なんて舌打ちしやがる。

「な、何だよ！ 僕に何の恨みがあるってんだよ！」
「無いわよ」

ふ・ざ・け・る・な！

女じゃなけりゃ、好みのタイプじゃなけりゃぶっ飛ばしてる！

「あんたが悪口言うから…」

「やつば恨んでんじゃねえか！」

「何よ。文句あるならまた蹴っ飛ばすわよ」

「うるさい！ 二度と蹴っ飛ばされてたまるか！！ もう僕に構わないでくれ！！」

「ふーん。でも残念。私たち同じクラスみたいよ？」

「んなこと知ってるよ！」

「あら、ちゃんと私の名前探してくれたんだ」

ニヤニヤ笑いながら冴草は顔を近づける。

いや、ち、近い近い近い！ つくそ！ なんでそんなに可愛いんだ！ なんでそんなに僕の好みの容姿なんだ！ 中身は悪魔のクセに！！

「あれ、顔が赤いよー？ 風邪でもひいてるの？」

「か、風邪なんかひいてないって！」

「ふーん、じゃあなんで赤いのさ？」

そう言って冴草はますます顔を近づける。もう引っ付きそうなほど近いです。

あ、口臭くないかな…。

ってそんなこと気にしてる場合じゃねえつつの！

ええい、落ち着け僕、いや俺！ しっかりするんだ。こういうときは素数を数えて。1、2、3、4、5…、素数って何だっけ？

馬鹿か俺！ 何？ ただの数列じゃないですか。

うわっ、思考なのに噛むとかがあり得ん！

「そうそう、あんたの名字の読み方『おおむら』でいいの？」

冴草は顔を離した。

「え、あ、ああ…」

「じゃあ春樹は、『しゅんき』？」

「そのまま『はるき』でいいんだよ」

「なるほどね。忘れなかったら憶えとくわ」

「なんだそれ…？」

憶える気無いな。

でも難しい名前じゃないと思うんだけど…。

「もしかして馬鹿？」

「はあっ!？」

ヤベッ、失言。

「少なくともあんたより勉強できるわよ」

「そ、それはようござんした…」

「……………また蹴るわよ？」

「ごめんなさい」

これと一年間クラスメートだなんて地獄だ…。

第4話（前書き）

先がまるで見えない

第4話

「はあ…」

「春樹、ため息したら幸せが逃げ出すんだぞ」

「もう僕に幸せはありません」

「タイソンのやつ相当重症だぜ？」

なんとも言う方がいい。誰も僕の気持ちなんて分かりやしないのさ。

チラリと沓草の方を見る。

向こうも此方を見ていた。何か企んでいるような顔でニヤリと笑っている。被害妄想かもしれないが…。もう、あいつが悪魔にしか見えない。いや、死神か。

—ガラガラ—

机に突っ伏していると教室のドアが開いて先生が入ってきた。

「えー、今年一年君達の担任をすることになった竜崎晶りゅうさき しょうです。よろしく。中には去年担当した子もいるからあんまり緊張せずにできそうです」

へえ、女の先生か。

綺麗というか可愛いというか、あからさまに女の子の子供の子してるな。あんなんでも先生になれるんだな。

「…えー、勘違いしている生徒も居るようなので、言うておきますが、先生は男です」

うそん!?

「可愛いよアキちゃん!」

「可愛いとか言っな!! 廊下に立ってる!」

うん、可愛い。

「でもその服装で説得力無いですよ?」

「う、うるさい! これは、職員室で無理矢理着させられたんだ! と、とにかくまずは自己紹介だ! 廊下側の列から順番に言ってあと、好きなものを一つ教えてください」

席順は最初なので五十音順になっている。

「赤松沙夜です。よろしくお願いします。好きなものは、そうですね。最近は紅生姜パンです」

だから僕の順番はわりと早めにやって来る。

「大村春樹です。よろしくお願いします」

「タイソンって読むんじゃないの?」

誰かが言っ。

「まあ、僕はどっちでもいいけど。ちなみに好きなものは鯖の味噌煮」

あだ名だけ一人歩きっていうのも面倒くさい。否定する気にもならなかった。

さて、僕の後一人置いて、次は陽太だ。

「片山陽太です。よろしく。好きなものは、お菓子全般。自分でも作ります」

陽太のお菓子好きはハンパない。この間遊びに行ったとき、ケーキ2ホールをペロリと食べていた。成人病が心配される。

さて、それからしばらくすると例のあいつの自己紹介となった。

「冴草兎卵石。好きなものは新聞」

新聞？

意外というか、まるで想像してなかったな。まあ、外見は優等生だから初見での印象としては間違っていないのかもしれない。

そしてつつがなく自己紹介は進み、良介の番がやってくる。

「谷田良介。好きなものは遅刻」

なんか変だが、とりあえず気にしない。良介は遅刻魔として有名だ。酷いときは午後からやってくるという重役出勤ぶりに、先生たちも匙を投げたという。

でもわざわざ好きなものとして挙げるのもどうだろう。

「ありがとうございます。始業式もやりましたし、取り合えず今日はこんなものです。お疲れさまでした」

初日なんてこんなものだ。

午後からは自由だけど、さてどうしよう。

「というわけでタイソン、ゲーセン行こうぜ！」

「唐突にどういいうわけか分からんけど賛成」

「陽太も行くだろ？」

「ごめん。今日は用事があるんだよ。悪いけどまたにしてくれない？」

「そうか。じゃあ仕方ねえな。行こうぜタイソン！」

「ああ」

鞆をもって立ち上がる。

「ちょっと待ってください」

と、一人の女子が話しかけてきた。

僕と良介は顔を見合わせる。

「えっと、確か」

あかまつ さよ
「赤松沙夜です」

そうそう。一番最初に自己紹介した子だ。

首くらいで切り揃えられた髪の毛で、前髪を上げておでこの広い子。ほんわかしたイメージの女の子だ。

「赤松さん。どうかした？」

と良介。

「ちょっとタイソンさんにお話が…」

自己紹介したのに、しかも初対面なのにタイソンだなんて、ただ浸透してんだよ…。自然とため息が漏れる。

「は、はい、何ですか？」

「実は…、その、あの…」

「？」

何かとても言いにくそうだけど、何を言うつもりなんだ？

「さよぼんどうしたの？ そいつらに苛められてんの？」

苛めているとは人聞きの悪い。

「苛めてるのはお前じゃないか冴草。主にタイソンをだがな」

良介…、やっぱり君は僕の味方なんだね！ 嬉しくて涙がちよちよぎれる！

「人聞きの悪いこと言わないで。タイソンが勝手に苛められてるのよ」

僕はマゾかよ！

「なるほど」

「納得するなよ！」

「あの、タイソンさん…」

「うおっ！」

忘れてた。赤松さんの存在が一瞬消えてたぞ。

「つまり言いたいことはですね…」

「さよぼん。帰りにケーキ食べようよ」

「あつ！ 行きましょう！」

「つて、おい！ 話が途中だよ?!」

「あ、すみません。それで私が言いたいののはあれです。その…」

もしもじとしながら赤松さんは言った。

「ぶっ殺してほしい奴がいるんです！」

「……………」

「は？」

「ですから、ぶっ殺してほしい奴がいるんです！」

「ちょちょちょちょと待ったあ!!」

可愛い顔して何言い出すのこの子は！　そういつのはどこかにプロフェッショナルがいるでしょ？　某十三とか！

「聞きました。タイソンさんの伝説。タイソンさんならきつとあいつをぶっ殺してくれるって…」

「穏やかでない空気だなタイソン」

「いや、殺すとかそういう物騒なのは避けてほしいなあ…、なんて」
「勿論、本気で言ってる訳じゃありません。ただ、それくらいの意気込みがあるというだけで…」

そうか、それなら安心した。

「だが断る！」

「ええっ!？」

「だって僕に全然利益が無いじゃないか」

「そ、それは…、確かに…」

「タイソン！　さよぼんの頼みが聞けないって言うの？　蹴っ飛ばすわよ？」

ぐ…、だがここで折れるわけにはいかない。

「蹴られてもダメ」

「おお、タイソンが冴草に対抗してる！」

「わ、わかりました…」

赤松さんもようやくわかってくれたみたいだな。

「それはよかー」

「私タイソンさんの彼女になりますからお願いします！」
「えー」

「ちょっと！ さ、さよぽん何言ってるの？！ こんなあの彼女になるって？」

「き、決めたんです！ 駄目ですか？」

と、涙目での懇願攻撃。

「や、ちょ……」

泣くならやめればいいのに。

ま、まあ、赤松さんは目立たない感じだけど、見た目も可愛いし、なんか守ってあげたくなるような感じだし、従順そうなところも……
って、ちがうちがう。

「これで断られたら私もうお嫁に行けません！」

お嫁とかそういう話じゃないと思うんだけど。

「タイソン、女の子にこれだけ言わせたんだ。お前の負けだよ」

「う……」

「そうよ！ これ以上さよぽん泣かせたら隣街まで蹴り転がしてやるから！」

流石にそれは……。

「どうなのっ？！」

「タイソン！」

「タイソンさん！」

三人に囲まれた。
逃げ道がない。

「わ、わかったよ」

「ありがとうございます！」

「はぁ……」

なんでこんなこと…。

第5話

「あいつです。あいつがうちの弟を…」

町のゲームセンター。そこから出てきたいかにも不良というかヤンキーな男。あいつが赤松さんの弟を恐喝し、金を取るだけ取って暴行を加えたそう。

「正直、警察に行った方がいいと思うんだけど…」

「それじゃあ腹の虫が収まらないんです！」

「例の作戦なら最悪の事態にはならないはずだ。タイソン、沙夜ちゃんのためだ！ 頑張れ！」

「さよぼんのためよ！」

ため息一つどころかマシンガンのように連射できそう。

「作戦どおりに頼んだぜ」

「はいはい」

僕はとぼとぼ歩き出す。

どうもあの男は自分より弱そうな相手を探しては金をせびっているとか。弱そうって言っても、実際どこで判断するのだろう？

冴草の例もあるから見た目だけで判断すると痛い目見るのに。

まあ、早く終わらせてしまおう。

とか思ってる側からなんか始めたぞ？

高校生くらいの男の子が歩いている。つつか、うちの生徒じゃん。それにあのヤンキーさんがぶつかって…。

「どこに目をつけてんだ…？」

「す、すみません！」

どう見ても自分からぶつかったように見えたけど。よくある手だよ。この後は大抵。

「慰謝料、払えよ」

ですよねー。

「あ、いや、その…」

そこで渋ると相手は付け上がるんだ。

「払えってんだよ！」

「す、すみません！」

回りの人は見て見ぬフリ。まあ、当然か。人は暴力に弱いからなああしかし、このままじゃ彼が払ってしまう。

後ろを見ると物陰に隠れた三人がイケイケとジェスチャーしている。

冴草、お前なら勝てるんじゃないか？

「行け！」

はいはい、わかりましたよ。行けばいいんでしょ、行けば。そんな怖い顔しなくなっただけです。作戦とは内容が変わってしまったけど、応用ができない訳じゃない。

僕はゴタゴタの場所へ歩いていく。そこまで行くと立ち止まった。ヤンキーさんと目が合う。

「ああ？ てめえ、何見てやがる。なんか文句あんのか？」

「た、たすけて……」

「おお？ よく見りやテメエら同じ学校か。じゃあテメエも慰謝料払ってもらおうか。連帯責任てやつだよ。へっへっ」

なんとというありきたりな展開。こんな場面に居合わせるなんて一生に一度有るか無いかだろ。すごく珍しい経験をしてるのに、浮かない気分なのは全部あのヤンキーさんのせいなんだろう。

「なんとか言ったらどうだ？」

「払うよ」

「へへ、それでいいんだよ」

さつき、人は暴力に弱いなんて言っただけど、全てにおいてそうというわけじゃない。対抗しうる力があるのなら、暴力に屈服することはないのだ。

勿論僕は金を払うつもりなんて毛頭無い。

けれど、払うと言った以上、渡さなければ相手が納得しないだろう。

ポケットに入れてあった財布からありったけの紙幣を取り出す。

「結構持つてんじゃねえか！」

それを手渡しでヤンキーさんに渡す。

「ん？」

と見せかけて紙幣と一緒にヤンキーの手を握った。

「おい、別に握手しろとは言ってねえぞ？」

「……………」
「…いつ！ イデデデ！ て、てめ、離っ！」
「お金、いらなの？」
「金はほし、いだった！ い、いらね、から、離せ！」
「もうこんなことしない？」
「しないしない！」
「わかった。じゃあ指一本で許してあげる」
「……………！！！！！」

声にならない悲鳴をあげたヤンキーさん。手のひらに、しっかりと碎ける感触が伝わってきました。

握っていた手を離すとヤンキーは金も持たずに逃げ出した。
これでまあ、しばらくは握手恐怖症くらいにはなるかな。

落ちて着いたところで金を拾う。これがないと生活が大変なんだよね。

「あ、ありがとうございます」

お金を拾い集めていると、絡まれていた男子生徒がお礼を言ってくれた。

「いや、同じ学校だし、あんな奴も嫌いだしね」

「ほんとうにありがとうございます！」

「おい、タイソン！」

良介達が駆け寄ってくる。

「タイ、ソン…？」

「流石だぜ！」

「今、タイソンって…」

男子生徒が僕を指差してわなわなと震えていた。

「タイソンって、あのうちの学校の最恐の…、ひっ、ひいつ！！」

「あ、おいっ！」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいいいいっ！！」

男子生徒は逃げ出した。

「なあ、良介。タイソンの噂ってどんな伝わり方してるんだ？」

これまで全く気にしてこなかったけど、さすがにあの生徒の様子は尋常ではない。

「その昔、我が黒柳高校には加藤真澄率いる悪の軍団が…」

「え、何？ その仰々しい語り」

「まあ黙って聞けよ。兎に角、その悪の軍団が学校を支配していた。しかし、昨年の入学式、地区最強とまで謳われたその軍団がまさかの解散をする。そこにはとある男の姿。彼はその軍団を千切っては投げ千切っては投げ、残虐非道な手法を用い、その軍団を解散させた挙げ句、彼らを配下に従え新たな軍団を作り上げた、と」

「はいストップ！ なんだその不良漫画的なストーリーは！？」

「でもこれがタイソンの噂だぜ？」

「私もそう聞いたわよ？」

「黒柳高校の有名な伝説ですよ」

なんとというねじ曲がり方をしているんだ。事実が全然おかしい方向へ行ってしまうているじゃないか。

…まあ、粗筋としては大体合ってるんだけど。

「とりあえずこう言いたい。それは誤解であると！」

「誤解も何も、さっきあやつてヤンキー撃退したことだし益々信憑性が増したわ」

「あ、でも誤解は一つありました。噂だととても怖い人のように言われてましたが、そんなことなかったんですね」

「大きな誤解はこの際置いておくとしても、少しでも判ってくれたなら嬉しいよ、赤松さん！」

本当に嬉しい。

「やだっ！ そんな他人行儀で。沙夜でいいですよ。私、あなたのものになります」

「えー…」

「ちよっ、さよぽん！ あの約束マジなの？」

「女に二言はありません！ それに、タイソ…、いえ。春樹さんとなら一生を添い遂げてもいいです」

「おー！ タイソンに嫁ができたぜ！」

「さ、さよぽん…」

どうしてこうなった…。

第5話（後書き）

どうしてこうなった…。

いや、ノープランから始めたものなので当然の結果なのですが。や
ってしまったからには最後まで責任持たないかね。

それに、今話でなんとなく方針が決まったのでよかったよかった。

…え、遅い？

第6話（前書き）

コソリ更新

第6話

おかしい。

絶対何かがおかしい。

「春樹さん、起きてください」

おかしすぎる。

僕は狂ったのか、妄想の果てに幻を見ているのか、それとも単なる夢なのか。

「いででで！ ひ、引つ張らないで、赤松さん！」

「沙夜です。そう呼んでください」

「呼び方はさておき、どうしてここに…」

「彼女ですから！」

この子はおっとりした見た目に反して実に行動的な性格のようだ。今日も広いおでこの彼女は僕の頬を引つ張っていた。

「遅刻しますよ？」

「遅刻ったって、まだ7時だよ？」

ここから学校まで徒歩20分程度。HRが始まるのは8時45分から。まだ早すぎる。早起きは三文の徳とかなんとか、言うけれど実際ど…

「早起きは三文の徳です」

ですか。

「早く支度しましょう!」

というか我が両親は何をしているのだ。見ず知らずの女の子が突然押し掛けて勝手に息子の部屋に上がってあんなことやこんなことをしているというのに。

「あら、沙夜ちゃんいい子じゃない」

と、母。

「青春は今だけだぞ」

と、父。

「いただきます」

と、何故か一緒に朝食をとっている赤松さん。
いつの間にうちの両親を抱き込んだんだこの子は。侮れん…。

「あ、春樹さんご飯お代わりしますか？」

「え、あ、うん…」

赤松さんは僕のお茶碗を取り、それにご飯をよそう。

「沙夜ちゃんならうちの息子も任せられそうだな」
「いえ、そんな」

やっぱりおかしい。

夢だ。これは夢なんだ。イツツ・ア・ドリーム、H A H A H A 。

目を瞑って開いても目の前の光景が変わるはずもなく、ゲームとか漫画みたいな世界でしかあり得ないだろうと勝手に思い込み、妄想の産物だと決めつけていた現実が目の中にある。

いや、そもそもこれが現実だとどうして言い切れる。なんだ、あれだ、私が蝶の夢を見ているのか、蝶が私の夢を見ているのかっていう、古文かなんかでやったあれに違いはない！ そうだ！ そうに違いはない！ あ、いやまて。そんなことを言っても、夢の中なら夢の中の登場人物は夢の中が現実だから、結局なんにしても現実には変わらないわけじゃないのか。というか私と蝶のようにどっちがというふうに比べるもの自体が無いじゃないか！

ぬあー！ 頭がこんがらがる！

「春樹さん、具合が悪いんですか？」

一人脳内会議をしていた僕の様子をどう受け取ったか判らないが、赤松さんが心配そうに僕の顔を覗き込んでいた。うう、どうしてそんなまっすぐな目で僕を見るんだ！ おでこ共々キラキラしていて直視できないじゃないか！

「だ、大丈夫…、です」

「もし具合が悪いんですしたら今日は休んだ方が…」

「平気ヘイキ、キニシナイデよ」

畜生！ その両親！ 何でそんなにこやかな顔でこちらを見ているんだ。

そりゃ、赤松さんはおでこだけど、普通に見ても可愛いし、性格も強引だったけど悪くないし、きっかけはなんであれ僕を好いてくれているのは嬉しいし。

「…ん？」

嬉しいのか。

なんだ、嬉しかったのか僕よ。色々段階をすっ飛ばしたせいで受け入れられなかったただけなのか。そうか、それならよかったじゃないか。素直に喜べよ。男の妄想に限られていた夢がほら今現実にくうして我が身に降りかかっている。

やー、よかったよかった。ほかあ幸せだなあ。

「……………って、ならねえよ！」

「あの、やつぱり…」

「あ、ごめん」

一人脳内ノリツツコミが暴発してしまったようだ。やはり、ここは落ち着いて状況を整理しようか…。って、見たまんまか。だが、こんな嬉しい状況をありのまま受け入れられるほど僕はできた人間じゃない。やつぱりおかしいんだ。赤松さんだってあんな約束守る必要のないのに。ただ、友達になりましょう、うふふで全然オツケーなはずなんだ。

よしそれじゃあ、言おう。赤松さんの気持ちをちゃんと確認しないと。

「って、あれー？」

「どうかしましたか？」

いつの間にか登校中？ 家を出た記憶が無いぞ？

考えすぎて物事に目が行かなくなったのか。赤松さんと2人並んで登校してるじゃありませんか。何にせよ、タイミングは今しかない。

「赤松さん」

「沙夜です」

「あか…」

「さ・よ・で・す」

「さよ…、ちゃん…」

「なんですか？」

「あんな約束守る必要ないんだよ？」

「え？」

「別にあんな約束守って彼女やらなくてもいいよ」

「ふーん、そうですか」

「うん。だから…」

「じゃあ、約束なんてどうでもいいです」

「じゃあこれで…」

「約束とか関係なく、春樹さん、私とお付き合いしてください」

「えー」

どゆこと？

ねえ、神様？

そついうのって僕の薄っぺらいプライド的に是非自分から言いたい台詞なんですけど。

「正式な私の告白として受け取ってください。とりあえず、お返事を頂くまでは友達以上恋人未満の微妙な距離で付き合わせてもらいますね」

「は、はあ…」

「じゃあ行きましょうー！」

「は、はい…」

ん…？

あれ？

なんというか、これって、状況的に何も変わっちゃいないんじゃない？。むしろ、真剣に相手の気持ちを考えて行動しなくちゃいけないようになった分、以前より状況が悪化したと、そう捉えられるんですが…。

んで、学校に着いたんだけど、教室で何故か怖い顔をしていた芽草が僕を待ち構えていた。

「ちょっとタイソン、屋上に来なさい」

「は？」

「いいから屋上に来なさい！」

「な、何？」

「いいから早く！」

「ひ、ひいつ?!」

物凄い剣幕だ。全然断れる雰囲気じゃない。断った瞬間蹴られて80日かけて世界を一周してしまいそうだ。

「というわけでさよぽん、タイソン借りるわね」
「トコちゃん…?」

あ、因みにトコちゃんてのは冴草のあだ名らしい。僕が呼んだら蹴り飛ばされたんだけどね。

そんなもって、半分引き摺られるようにして僕は屋上にやって来た。

「な、何をしようっていうんだよ」

「決闘」

「前にやったじゃないか！ 僕の負けだ。それが何か気に入くないの？」

「ええ、気に食わないわ。私は不意打ちで勝っただけですもの」

「不意打ちでも勝ちも勝ちだろ？ 僕はもう蹴られるのは御免だよ」

「そんなこと言ってられるのも今のうち、よ！」

「ちよっ！？」

素早い蹴りが僕の前髪を掠めた。

「次、当てるから」

「待て！ 僕の話聞け！ 五分だけでもいい！」

「HRまでに済ますんだから時間はないのよ！」

「そんな勝手な都合！」

「勝手に結構！」

右側頭部への蹴り。不味い。避けきれない！ 当たるしか…、でもあの蹴りは下手したら首が飛ぶ、というのは大袈裟でも少なくとも首が折れる。てかどっちにしる死ぬ！

— パアンツ！

耳元で聞こえた乾いた音。これが女の子の蹴りの音ですか…。

「あ、あぶねー！」

「ようやく正体を現したわね、タイソン」

「正体？」

「私の蹴りを受け止めたわ」

「女の子の蹴りくらい受け止められるよ」

「そうかしら。私は本気で蹴ったのよ？ それこそ殺すくらいのつもりで」

なにそれこわい。

いや、洒落になってないっすよ！

「受け止められる程度ってことで…」

「それじゃあ少し退いてくれる？」

「う、うん」

芥草は僕の横を通り過ぎ、屋上から下る階段のある場所まで行くと、足を振り上げ、思いつきコンクリの壁に叩きつけた。ポコンかベコンか、聞いたこと無いような音が空にこだました。壁はベコリと凹み、多くの亀裂を走らせながら、辛うじて壁としての機能を残す。

「うそん…」

「今のは本気じゃないわ」

「まじっすか」

「あなたはそれを受け止めたのよ。その手で」

「えっと、つまり…？」

「あなたの異常握力。それが噂の悪の軍団を解散させた力、でしょ

「？」

「冴草のそれは…」

「異常脚力」

「ど、どうりで…」

「だから、私を受け止められるのはタイソン、あなたしか居ないのよ」

まあ、確かに。コンクリを砕く蹴りなんて誰が受け止められると
いうのか。

「だから…、その…」

突然端切れの悪くなる冴草。どこかで見たような光景が…。

「な、なにさ？」

「えっと…」

そうそう、そうやって大人しくしてさえいれば可愛いんだよな冴
草は。

「だからつまり、わ、私と…」

デジャブ？ どこだっけ、確か今と似たような状況に遭遇した記
憶が…。

「わ、私と付き合いなさい！」

「どこに？」

「…ば、馬鹿！ 何言ってるんのよ！ こういう場面で言うことって
ひとつに決まってるでしょ？！」

「殺されそうになったあとで…？」

「何よそのリアクション」

「どういう経緯で?! 何があつて?! どうしてこうなつた?!」

「そ、そもそも、前に呼び出したときに言つつもりだったのよ!

…でも、やっぱり緊張してワケわからないこと口走って蹴飛ばしちやつて…」

混乱するのは俺だ! こんな状況想定してないつての。まさに想定
定の範囲外だつての。

「返答はまたでいいから」

「ちよつと!」

冴草は僕の声を見殺して階段を駆け降りていった。

取り残された僕はというと、冴草と赤松さんの突然の告白に板挟
みにされて、ただただ狼狽えるしかなかった。

第7話（前書き）

久しぶりに更新。

だけど、久しぶりすぎて書き方がちょっと...orz

第7話

おかしい。

絶対何かがおかしい。

つい先日にもこんなことを考えた気がするが、それでもやっぱり何かがおかしい。

「春樹さん、起きてください」

「早く起きなさい」

おかしさ二倍（当社比）のこの現状。いつも朝見上げる視界の中に女の子が二人。

「何が…、起きているんだ…」

「タイソンが起きてんのよ」

「体調が優れませんか？」

「いや、そういう意味じゃ…」

下校のとき校門で別れるから二人とも家の方向は違うはず。それが何故態々うちまでやって来る必要があるんだろう。

はあ、やっぱり夢だ。長い夢を見ているに違いない。よし、寝よう。

「夢、それはドリーム、だね」

「って、その意味の無い直訳はなんだよ」

ああ、これどうしたことが。

「なんでお前らまで居るんだ。そして心の中を勝手に読むな」

陽太と良介までもが僕の部屋に居た。ただでさえ狭い部屋なのに、もう人が座れるようなスペースなんてありやしない。しかも比率的に男が多いのがいただけくないです。

「…で、皆さんお揃いで何か御用ですか？ 今日とは休日だったと思うんだけど」

「なんだ、忘れたのか？ 今度の休みは皆で遊びに行くって決める？」

「……………あー、そういえば…」

曖昧な記憶の中に、そんなことを喋っていた良介がいる気がする。

「して、どちらまで？」

「それさえも忘れたか！ これを見る！」

と言って良介が小さな冊子を投げつける。

それは何やら楽しげな一家の写真が散りばめられたもので、思い出の一コマの数々…、のようなコンセプトで作成されたであろう遊園地のパンフレットだった。トレジャーランドというなんともベタな名前で最近オープンしたばかりのスポットだ。

「友達と遊んで愛を育もうという企画だ」

「うん、とりあえず同性で愛は育みたくないな」

「だから今日は女性陣もいるんだよ、春樹」

「と言ってもだな、人数的に合っていないよな？」

冴草、赤松さんの女二人と、僕と良介と陽太の男三人。

いや、別にデートってわけじゃないんだから、人数は合ってなく

てもいいんだけど、なんかなあ。

「心配は無用だぜ！」

「僕の妹が参加するよ」

陽太の後ろからひょっこりと顔を出した女の子。というか今までそこに隠れていたというのか。だとしたらなんという隠密スキル。

「春樹には必要ないと思うけど、一応紹介しておくよ。妹の月子つきこだよ」

「よ…、よろしくおねが……………」

声が小さくて最後の方は聞き取れなかった。

勿論僕は月子ちゃんのこととはよく知っている。陽太と同じく小学校からの仲。僕らの一個下だ。とても恥ずかしがり屋で、付き合いの長い僕にさえこんな感じである。陽太の話では内弁慶であるようだ、正直それは全然想像できない。

「人数は揃ったわね！ それじゃあ行きましょう！」

「おい冴草が仕切るなよ。計画を立てたのは俺なんだぜ？」

「分かってるわよ。でも早く行かないと、人気のアトラクションはすぐいっぱいになっちゃうんでしょ？」

「そうですね。トコちゃんの言う通りです」

「い、行きまし……………」

「ってか今何時さ？」

早く行っただってあんまり変わらないと思うんだけど。

「四時半だ。タイソン」

「早っ！？」

何すんなり起きてんの自分！？ え、うえっ！？
やばい、時間が分かったら眠たく…。

「ぐー…」

「寝るなバカたれ！！」

へいへい、起きればいいんだろ、起きれば。

と、いうわけでやって来るはトレジャーランド。

休日というせいか、開園前だというのに人がごった返している。

短い休日をどうしてこんな気を使う場所で過ごそうというのか。まったくそんな連中の気が知れないな。

「つて、回りから見れば僕もそのうちの一人なんだけどね」

「何独り言しゃべってるの、春樹」

「陽太、きつと今日はよくないことが起こる」

「なんで？」

「勘だよ」

「よっしゃ！ 皆行くぞ！」

開園時間と同時に良介が号令をかける。
入場券は既に買ってあったけど、人の列が長い長い。結局入るまでに十分程度かかってしまった。

「ここがトレジャーランド…」

冴草が恍惚とした表情で思わず呟いていた。

「そんなに went たかったのかよ？」

「当たり前でしょ！！」

「うおっ?!」

冴草が怖いを思いつきり近づけて反論する。

だけど、すぐににこやかな笑顔になつて遊園地の中を見渡す。

「遊園地初めてなんだからはしゃいだつて別にいいじゃない」

「冴草さん遊園地行ったことなかったんだ」

「そうなのよ！　うちは家族旅行とか温泉ばかりでこういう場所に縁がなかったのよ！」

初遊園地か。僕も初めて行ったときははしゃいだなあ。

「何よその顔」

「いやいや、強烈脚力の冴草の微笑ましい姿を、後々いびるネタとして触れられるように鮮明に記憶させておこうと思つて」

「遊園地の中心で悲痛な声を叫ぶ？」

「やめてくれ」

ナイスな笑顔で恐ろしいことを言う冴草に、僕もナイスな笑顔で答える。

「普通なら人気のアトラクションから潰していくのが定石だが、今回は別の作戦でいこうか」

「と言うと？」

「なに、順番を逆にするだけの話さ」

「不人気のアトラクションから乗っていくわけだね」

「ざつつらいと！」

「だけどそううまくいくもんか？」

「谷田さんにさん……」

「おお、陽太妹、よく言った！」

「僕もそれで構わないよ」

「私もいいですよ」

皆良介の意見に賛同している。僕も特に断る理由はないし、良介の話に乗っておくか。

「じゃあ僕も……」

「異議あり！！」

僕の声を遮つての割り込み命令が入りました。

「どうしてみんなそんなに控え目なの？ もっと強気で攻めないと回りに吞まれちゃうわよ！ 今日という日を私はとつても楽しみにしてたのよ！ 今日は戦争に出向くくらいの意気込みでやって来たのよ！ それじゃダメよ！ ダメダメなのよ！ ね！ タイソン！？」

「そんな熱血な言い種で振られても……」

「だってタイソン何も言ってなかったでしょ？ 遅刻魔の意見に賛同するか悩んでたんでしょ？ ちようどいいじゃない！」

言う前にお前が言ったんだろうに。それに何がちょうどいいのかわからん。

「だから僕は良介の意見にさ……」

「異議を認めよう！」

割り込み命令再び。

「確かに沓草の言うことも一理ある。ならばチーム分けをしようじゃないか」

「チーム？」

「ここに六本の棒がある。都合よくな」

良介が竹串のような棒を握りしめていた。本当に都合いいな。まあ、遊びに真剣な良介なら用意していても不思議じゃないか。

「さらに！ 何故か色分けまでされている用意周到さ！ 同色を引いたもの同士がチームだ。ちなみにチームはツーマンセルだぜ！」

「確かにそれが手っ取り早いね」

「ならば引け！」

全員が思い思いの竹串に手を伸ばす。

「いいか？ せーの！ で見るんだぞ？」

「わかったから早く」

「せーの！」

引っこ抜かれた竹串。その先には緑色のペンで色が塗られていた。

「あ、トコちゃん一緒ですね」

「さよぽんなら安心ね」

「陽太が」

「はは、僕女の子役やるうか？」

「いらんわ！」

みんな相棒が決まっているようだ。
となると、僕の相手は…。

「春樹お兄ちゃん、よろ………」

「うん、よろしく月子ちゃん！」

正直、相手が月子ちゃんでもよかったと思う。冴草や赤松さんと二人きりになるのは、今はちょっと居心地が悪いだろうから。

「それじゃあ全員相手は決まったな。今は9時30分くらいだ。昼には一旦、この場所に全員集合だ。昼くらい一緒に食べようぜ？」

「わかったわ。さよぽん行きましょー！」

「あ、トコちゃん待って！」

アリスはウサギを追って不思議の国を冒険するんだっけ。冴草をウサギに仕立てるには少々凶暴かな。赤松さんをアリスに仕立てたところだけど、雰囲気がちよっと違うし。

「陽太、アーケード行こうぜ！」

「素直にゲーセンって言いなよ」

この二人はいつも通りか。というか、良介、君は遊園地に何をしに来たんだ。

「春樹お兄ち………」

隣から消え入りそうな声が聞こえる。

このメンツの中だと、月子ちゃんはやっぱり影が薄いな。

「ごめんごめん。月子ちゃん、何か乗りたいものある？」

「春樹おに……………」

「ん？」

「ジェットコース……………」

「あ、ジェットコースターだね。じゃあ行こうか」

一瞬変な返答を耳にしたようだけど気にしない気にしない。

でもなんだろう。馴れ親しんだ月子ちゃんのはずなのに、なんでこんな冷や汗をかいてるんだろう。

こんな日は決まって良くないことが…。

「……………」

ああ、朝起きた時点で良くないことは始まってたんだっとな。

第8話（前書き）

ジャンル学園で分類しているくせに学園があんまり舞台になってない！

第8話

ジェットコースターは、はつきりいつて得意じゃない。

別に乗れないわけではないが、自分から進んで乗ることはしない。
下るときのあのフワツとした感覚が気持ち悪いからだ。

「春樹お兄ちゃん、だいじ……………」

「う、うん、大丈夫」

嘘です。ごめんなさい。気持ち悪くて朝食べたものが戻ってきそうです。

うっぷ…。

「次はどれにする?」

黙ってたら本当にリバーズしてしまいそうだ。
喋って誤魔化す。

「あれがい…」

月子ちゃんが指差したのはミラーハウス。サブタイトルのように
“鏡の大迷宮”と看板が掲げてある。“大”と書いてあるわりに建物
は大きくない。そういうコンセプトなんだろう。簡単な迷路に決
まってる。

「じゃあいこうか」

「うん…」

というかホント、月子ちゃんは大人しいな。沓草にも見習ってほ

しいもんだ。そうすれば僕だって…。

ん？

僕だってなんだってんだ。いかんいかん。今は冴草の居ない平和な時間を満喫できるチャンスじゃないか。あの暴力女は取り合えず置いておけて。

「……………」

「…な、何？ 月子ちゃん？ …あ」

いつの間にか立ち止まっていたようだ。女の子を妄想して動きが止まるとは情けない。

「他の……ヒト考えてた……………」

いつも以上に小さな声で月子ちゃんが言う。

「え？ 何を考えてたって？」

「……………」

月子ちゃんの口だけが動いてる。

残念ながら読唇術の心得はないんだよ。

「チャンスは……………！」

なんか意気込んでるみたいだけど、やっぱり聞き取れないなあ。
横に立っていた月子ちゃんが僕の前に出て、スカートを翻しながら
振り返る。

「早く行……………」

「え？ あ、うん」

僕は月子ちゃんに腕を引かれ、ミラーハウスのところへ連れていかれた。

その時は考えてもいなかった。これから面倒事が起きるなんて。

「正直参った」

「……………」

月子ちゃんが僕を見ている。

「参った」

迷った。

「まさか迷子になるとはなあ」

嘗めてかかった結果がこれだよ！ 本当情けないね。壁全てが鏡ゆえに、正面だけ見て歩いてたら道が分からなくなってしまった。鏡よ鏡よ鏡さん。世界で一番美しい、じゃなくて、出口は何処ですか？

って答えてくれるはずもなく。歩き続けること十余分。パーフェクトに完全無欠に非の打ち所無く迷子です。迷子の迷子の子猫ちゃんと猫ですよ。ドッグポリス居ませんか？

あ、家に連れて帰ってもらっても意味がない。

「また行き止まりか…」

進んでは三方を壁。進んでも三方が壁。どこか分かれ道ありました？ 同じところをうろろしてるんだろうけど、何処に行っても同じにしか見えないよ。やっぱり天井を見て行動すべきだったかな。安全性のためなのか天井と床には鏡がはってないので、そこを見たら通路は分かりやすい。

本当に大迷宮だよ。

「ん？」

よく見たら行き止まりの壁に看板みたいなものがある。

『聖なるバリアを砕くミラー4th』

なんか某カードゲームのあれに似つかわしいネーミングだな。更によく見ると、鏡の壁にうつすらと切れ目が入っている。壁に触れてみるが何も変わった様子はない。

「押して駄目なら………」
「引いてみるって？」

月子ちゃんの言う通り引つ張ろうと試みるが、何せ掴む場所がない。引こうにも引けないよ。

「引き戸……」

月子ちゃんが壁に手を触れると、鏡の壁が横にスライドして、その先に新たに小さな部屋が出現した。

「おおすごい！ こんな仕掛けがあるんだ！」

「パンフレット見……」

「パンフレット？」

入場口で貰ったパンフレットを開いてみる。

園内のマップだ。

横から月子ちゃんが覗き込み、マップの端っこを指差した。

小さな文字で何か書いてあるな。

「トレジャーランドに隠された秘宝を探し出せ！ それは物だったり、場所だったり、人物だったり。数々のお宝が君を待っている！ さあっ！ レットトレジャー！」

声に出す意味はなかったが…。

だけどなるほど。この部屋はトレジャーというわけか。トレジャーランド、意外と味な真似をするじゃないか。

「入ろうか」

月子ちゃんがコクンと頷く。

意気揚々と隠された部屋に入る。そこも一面鏡張りで、今までの通路と変わったところはない。しかも5メートルほど進んだところで行き止まり。

秘宝と言えるものなのかどうか甚だ疑問だ。

月子ちゃんも困惑したようにキョロキョロしている。

「なんか拍子抜け……」

「うん」

『聖なるバリアを砕くミラー4th』と銘打って、何もないというわけ無いはずだけど。

んん!?

よくよく見ると他とちよつとなんか雰囲気が違うな。

「あっ!!」

わ、分かった! 『聖なるバリアを砕くミラー4th』の意味が!

「つ、つ、つ、月子ちゃん、出よう!」

わわっ! 焦りすぎて言葉が詰まったぞ!

月子ちゃんが不審そうに首を捻っている。突然慌てて出るとか言い出せば当然だ。

でもここはなんとしても『気づかれる前に』出ていかなければならない。穩便かつ平穩な時間を送るために、いまここで気付かれてはならないのだ。

「でも、入ったばっ……………」
「い、いいから早く出よう！」

腕を引つ張って強引に連れ出そうとするが、月子ちゃんは断固としてその場を動かうとはしなかった。

だからその場所に居るのがまずいんだって！　少しでいい！　ほんのちよつとでいいからそこを動いて！

「春樹お兄ちゃん、変……」

僕は健全な男の子だぞ！　変にもなる！　ああ、このよこしまな気持ち溢れる前にそこを退いてください！

あ、いや待て。僕が出ていけばそれで済む話じゃないか。月子ちゃんは気付いてしまつかもしれないが、気付いた瞬間その場に居合わせるよりはるかにマシだ。

「じ、じゃあ、僕は外で待ってるから……」

今度は月子ちゃんが僕の腕を掴む。逃がさないといった瞳で僕を見ている。後生だから逃がして！　この場から遠ざけさせて！　畜生！　何が秘宝だ！　こんな気まずい気持ちにさせる秘宝なんて、悲報を呼びそうな秘宝なんていない！

「うぷっ……」

鼻の奥から熱いものがつつてくるのが分かる。見ないようにしていたのに、どうしてもその秘宝に目が行ってしまう。男だ。仕方ないと言えば仕方ない。反応してしまうのも仕方ない。だがこれは、生殺しだ。

顔を押さえて屈み込む。これでいろんな気持ちを誤魔化せる。は

ず…。

「だ、だいじょ……！？」

と言つて月子ちゃんも僕の前で屈んだ。

うん、気持ちは嬉しいんだけど、視覚的にも嬉しいんだけど、今君は僕の病状を悪化させていると気付いているのかな？

ふわふわしてるのに普段は鉄壁ともいえるその布が、この部屋に入った途端に崩れ去ったのだよ。君の気づかない間にね。本当に恐るべき秘宝だよ。『ミラー4th』。

「……………あ」

ついに月子ちゃんも分かったみたいだ。秘宝の在処が。

答えは単純。名前の通りなのだ。ミラー4th。四つ目の鏡。僕は今どん詰まりにいる。普通の迷路で言うならば、退路以外三方を壁に囲まれた状態だ。ここはミラーハウスなのでその壁は鏡となる。つまり、三つの鏡がその時点で存在することになる。そこにこの秘宝のヒントはあるのだ。左右と前方、そこが鏡。後方は通路なので鏡は無い。さて、ここで残りひとつの鏡を何処に持つてくるか。前後左右の可能性を絶ったので、更に答えは導きやすくなった。残念ながら僕はうなじフェチではないので、上に鏡があったところでこんな状況に陥ることはない。

ならば答えはひとつ。『聖なるバリア（スカート）を砕く四つ目の鏡』。下、だ。

月子ちゃんの顔がみるみるうちに赤く染まっていく。でももう遅い。僕の目にはしっかりとその青い横縞が焼き付いている。

…でもね、悪気はなかったんだ月子ちゃん。それだけは信じて。

「¥\$%#&@ ……！！」

月子ちゃんは声にならない悲鳴をあげて立ち上がる。

まって！

それじゃあ余計に！

「あ…ああ…」

見上げる僕。

見える横縞。

「つ、月子ちゃ…」

次の瞬間、僕は月子ちゃんの渾身の蹴りで顔を蹴り上げられた。

これも冴草からやられた慣れだろうか。不思議と痛くはなかった。

本当に痛かったのは、その後床で後頭部を強打したときだった。

第9話

「春樹お兄ちゃん、ごめ……………」

「いやいや、いいよ。あの場合は仕方ないから」

後頭部が痛い。あと、蹴られた衝撃はなんともなかったけど、どうも少し切れてしまったようで、顎の下をさわると微量の血が手についた。

うん、まあ、許容範囲だよね。

「ごめ……………」

「もういいって。それじゃあ、今度は何乗る？」

「……………」

あっちゃあ、なんだろこの気まずい空気は。なんて嬉し…………、いや、面倒くさい秘宝なんだ。こんな状況にするなんて。こういうとき、どんな顔したらいいかわからないの。

「月子ちゃん、次何乗る？」

「……………」

「メリーゴーランドとかあるよ？」

「……………」

メリーゴーランドは嫌だったかな？……………ああ、現実逃避はよそう。

「じゃああれ乗ろう！」

月子ちゃんの手を引き、別のアトラクションへ行く。

あれだ。

水の中にドボンと飛び込むあれ。滝。ウォーターフォール。絶叫系ならさすがに声を出さざるを得ないはずだ。

と、思っ て意気込んで列に並んだものの、やはり人気アトラクションなのか長蛇の列だ。

そして、前にも言った通り、僕はジェットコースターとか絶叫系は得意じゃない。並んだ後で後悔しても遅いが…。

しかし、後悔先に立たず。僕らの番がやって来る。

丸太を模した船に乗ると、船はゆっくりと進み始めた。

道中にはちよつとしたビックリポイントの急な段差があったり、周囲の仕掛けや景色を堪能しながら進んだ。そして急な上り坂。山の中へと入っていく。

暗いくらい洞窟は、照明が光ったり、恐竜がいたり、外とは違って変わって不安を募らせる。

「春樹お兄…」

だんまりだった月子ちゃんがようやく口を開いた。

「どうしたの？」

「秘宝があ…」

「どこ？」

ここにも秘宝があったのか。

ただどライド系は常に移動してるから、気づいたときにはもう遅いようだ。

どこどこ？と首を捻っているうちに坂を登りきり、からだがかク

ンと傾き始めた。

「わあああああああ！」

「きゃあああああああ！」

と、様々な叫び声が飛び交う。

「きゃ……」

という月子ちゃん。

ええ、完璧なまでに当てが外れました。叫び声が途中で切れることなんてない。そう思っていた時期が僕にもありました。

そもそもジェットコースターに乗ったときに気付くべきだったんだろうけど、なんせ余裕が全く無かったのですよあれは。

ちなみに今回、僕はというと、完全に油断していて不意をつかれたため、声にならない叫び声をあげていた。

情けないなあ……。

船は水に突っ込んでいった。たくさんの水飛沫がふきあがり、それがおもいつき乗客を濡らした。

当然のごとく僕らも例外なく濡れた。

水も滴るいい男ってか？

…ウホッ？

何それ？

「あはは、流石にタオルが置いてある」

船から降りてすぐの場所に、トレジャーランドオリジナル的なタオルが並べてあった。折角なんだから売り物にすればいいのに。プレゼントする余裕があるのか……。恐るべし、トレジャーランド。

「月子ちゃんも拭きなよ。風邪ひくよ?」
「あ、ありがとう……」

お、珍しく最後まで言葉が聞こえた。

「絶叫系もたまに乗るくらいならいいかもね」

「私は……好き……だけど……」

「けど?」

「春樹お兄ちゃ……無理して乗らなく………」
「無理はしてないよ」

嘘です。吐きそうです。

「顔、真っ青……」

「マジ?」

「嘘」

「……な、なんだよそれ」

月子ちゃんにからかわれるとは思いませんでした。

「春樹お兄ちゃ……」

「ん?」

「もうおひ………」

「ああ、もうお昼か。最初の広場に集合だっけ? 良介の奴、こう
いうときだけは時間厳守だからな。間に合わなかったらうるさいぞ」

遅刻魔のクセになあ。

それとなく良介を責めつつ、僕と月子ちゃんは集合場所へ向かった。

「一分と十二秒遅刻」

良介が不満そうな顔で腕時計を見つめていた。

「良介、時間ずれてるぞ？」

「え？ マジ？」

「マジマジ。マジヤバイ！ 致命的にヤバイわ」

「これ電波時計だぜ？」

「チツ……」

「ああっ！ タイソン今舌打ちしただろ？！」

「してないよ」

「した！」

「まあまあ、落ち着きなよ良介」

陽太の仲裁で一旦この場は収まる。

その後も良介はウダウダ言っていたが、とりあえず全部聞き流すことにした。

そして僕らは昼食を食べるために、適当なレストランに入ったのだが、甘かった。昼時のレストランは完璧に容量オーバー。入店率120%で回転率は10%くらい。待てど暮らせど入れるわけがなく、諦めた僕らはハンバーガー等の軽食で簡単に済ますことにした

のだった。つうか、どれだけ人気なのトレジャーランド？！
そして。

「よし、メンバーチェンジな！」

良介の言葉を全て聞き流していた僕はメンバーチェンジと聞いて驚いた。

再び現れた竹串。

例のごとくそいつを引っこ抜く。

先の色は『赤』。

「あ、今度は春樹さんですか！」

と言うのはおでこの赤松さん。

赤松さんは当然といった風に僕に腕を絡ませてくる。

「ちょ、ちょっと?! 赤松さん?!」

「沙夜ですつ！」

「さ、沙夜……、ちゃん。そんなにくつつかれると……」

初期の印象と大分変わってしまったなあ、この子は。

「いいじゃないですか。減るものじゃないですし」

いや、なんというか、僕が精神がね、こう、ゴリゴリと石臼で磨り潰されるように磨り減っていくわけですよ。

ほ、ほら、冴草のあの魂を抜かんばかりの威圧のこもった視線と笑顔でさ。

でも、こればかりは未だ返答をしていない自分が悪いわけで、何も言えないわけで。

というか、こんな状況でよく冴草と赤松さんはいつも通りにして
いられるな。もっとギクシャクしそうなもんだけど。
やっぱり僕が早く応えるべきなんだろうけど…。

…けど、本当のところ僕は分からない。この二人に出会ったのは
つい最近のことなのだ。突然告白されて、「うん、いいよー」と答
えられるような甲斐性は、生憎持ち合わせていない。
要するに世間一般で広く知れわたっている『ヘタレ』という存在
なんだろうな、僕は。

握力はあるんだけどなあ。まともな場面で役にはたたないし。役
立たずな僕。

…あ、自分で言ってる切なくなってきた。

「げっ、冴草とかよ」

「チツ…！」

「ああっ！ お前まで舌打ちを?!」

「まあまあ、良介落ち着いて」

と、再び陽太。

「……………ん？ って、ことは、僕は月子と?」

「よろしくね、お・に・い・ちゃ・ん」

「ぐ…」

あれ？ 月子ちゃん普通に喋って…。

「つ、次は15時集合な！ もう一回入れ替えするから！」

こうして僕らはまた別行動をすることになった。

「さて、何に乗ります?」

「んー、特にこれってのは無いかなあ」

「それでは、あれはどうですか？」

と言つて赤松さんが指差したのは。

「トレさんのトレジャーライフ？ てか、トレさんて？」

「トレさんはトレジャーランドのマスコットキャラクターですよ？
正式名称はトレジャー・ショーンズ」

あの帽子をかぶったカウボーイ風の髭を生やした渋いあのイン・イジョー。ズ似のおじさまをデフォルメしたようなあの着ぐるみがマスコットキャラクターだって？

てか、妙に詳しいな赤松さん。

「で、あつちの女の子がジェーンちゃん。あの犬がバター。そこのおじいさんがジアイムズ。であそこの…」

「わ、わかった。うん。ありがとう。よく分かったよ」

赤松さんがやたら詳しいと言うことがよくわかった。

「これだけ詳しいと、秘宝の事もよく知ってそうだね」

「ほぼ全部分かりますよ？」

それでもほぼなのか…。

トレジャーランド、恐るべし…。

「ただ、ミラーハウスの秘宝。女の子と行く場合、あれは気を付けた方がいいです」

「後の祭だよ」

「へ？」

到着した時点で…、いや、出発する以前に…、いやいや、遊びに行くとした日に伝えてほしかったなあ。

「取り合えずそのトレさんのなんとかに行こうよ」

「はい。了解です！」

メンバーチェンジ。

ずっと赤松さんのターンが始まる…！

何勘違いしてやがる！ 赤松さんのターンはまだ終わっちゃいないぜ！

「ひょっ?!」

「ど、どうしたんですか、春樹さん？」

「いや、すまない。ちよつと悪夢が…」

「悪夢って…、寝てたんですか？」

「いや、思い出し笑いみたいにおかしな記憶の断片が突然蘇った、そんな感じかな」

「は…、はあ…？」

赤松さんのターンは始まったばかりなのである。

第10話

『トレさんのトレジャーライフ』。

それは大がかりな仕掛けのあるステージで行う舞台だった。僕らは座って事の成り行きをドキドキしながら見ていればいいのだろう。幸いなことに、たいして並びもせずに最前列に座ることができた。それはこのステージがあまり人気がないということなのだろうが…。それに僕は赤松さんの提案でついでにただなので文句を言える立場ではない。まあ、面白い面白くないの判断は舞台を見てからでも遅くない。

目の前に広がるのは海を模した巨大なプール。左右には見上げるような巨大な岩があり、右側の岩には木製の小さな足場が見える。

『トレジス・ショーンズの冒険が今日も始まる』

などというナレーションが入る。どうやら本番開始の様相だ。

「これ、前に座ったら水がかかるんで覚悟してくださいね」

今さら言われてもとてつもなく遅い。いや、席こそスカスカに空いてるけれど、今から動くのはなんだか気が引ける。

こういう場合、動いたら後ろの少しやんちゃそうな方にいちやもんをつけられるってのが世の常で…。お約束というもの。そんなお約束を踏まないために、僕は動かない。

「チツ…」

背後から舌打ちが聞こえた。

お約束ってのは誰かが意図的に用意しているものだったのか…。

これは勉強になった。

「ほら春樹さん！ 始まりますよ！」

「あ、わか——」

—バシャン！

「たばべっ?!」

開始早々水を浴びた。

滴る水を振り払って舞台を見ると、小さいボートがプールの水をワザと撒き散らしながら進んでいる。
ワザと、だ。

「ずぶ濡れ……」

ウォーターフォールより惨事だ。

「カップを準備しないからですよ、春樹さん」

などと言っている赤松さんはしっかりとビニール製のカップを準備していた。

うん、だからね、ずっと言ってる気がするけど、そういうことはもっと早く——。

—ベシャン！

にこやかにボートを運転する役者。
舞台後にちょっと楽屋裏まで来てもらおうか？

―パシャン！

「……………」

もはや何も言うまい。

いや、あえて言わせてもらう！

「その役し——」

「テメエ、立つんじゃねえよ！ 見えねえだろうが！」

「あ、すみません……」

勢いに任せて立ち上がってしまったようだ。まさか、こんな形でお約束を踏むことになるとは……。不覚……。

というか後ろはまだ待ってたんだな。出待ちご苦労様です。

「どうでしたか？」

舞台終了後、赤松さんが嬉しそうに訊いた。

「まあまあ」

どうだったか、その問いに僕は冷たかったと答えるしかない。濡れたあの姿で舞台を楽しめるはずもないじゃないか！

「……少し休みませんか？」

という赤松さんの提案。

「トコちゃんがすぐくはしゃいじゃって、ちょっと疲れてたんです」
舌をチロリと出して赤松さんは悪戯な笑みを浮かべる。

「でも、どこも人が一杯でゆっくりできる場所なんて…」
「大丈夫ですよ」

赤松さんは得意気に胸を張る。

「ほら、あそこ」

「なるほど。別にアトラクションばかりというわけじゃないんだ」

遊園地内のちよつとした高台にその場所があった。

緑の生い茂る透き通る池の傍。そのベンチに僕は座っていた。

「園内にも秘宝はあるんですよ。みなさんアトラクションばかりに
目が行きがちですから、こういった場所は発見されにくいんです」
「凝ってるなあ」

ずいぶんと綺麗な場所だ。手入れも行き届いていて、見つけた人は
さぞ嬉しいと思う。

少し遠くなった園内のBGM。賑やかな周囲と切り離れたよう
な空間は落ち着ける場所だった。

休憩も含め、ゆっくりすることにした。

「春樹さん」

しばらくすると赤松さんが口を開いた。

「なに？」

「春樹さんは、私のことどう思ってますか？」

これまた直球な問いかけだ。

正直なところ、なんと言えいいのかわからない。 赤松さんのことは好きだ。

でもそれは異性としてではない。 同級生として、いち友人として、そういったものだ。

彼女が望んでいるであろう、恋愛感情という意味では、申し訳ないが持ち合わせていない。

「……………」

やっぱりこのままではいけない。
いけないだろう。

きっかけがどんなものであれ、僕を好いてくれたこの女の子には感謝している。

だからこそ、このままではいけないのだ。
赤松さんのためにも。

「僕は……」

「ち、ちよつと待ってください！」

赤松さんが僕の声を制す。

「やっぱりいいです。今の質問は無しで！」

「でも…」

「春樹さんを見ていたらわかりました。私が望んでいるような答えはいただけないと…」

「ごめん…」

赤松さんは立ち上がると、池のほとりまで歩いていった。

「赤松さ…」

「ご、ごめんなさい。ある程度覚悟はしていたんですけど…、いざ面と向かって言われると怖くなっちゃって…。はあ…、ダメだな、私。自分で切り出して墓穴を掘った感じです」

赤松さんは背をこちらに向けたままだ。

「やっぱり、トコちゃんには敵わなかったかなあ…」

「……………ん？」

ちよつと待て。

赤松さんは何を言っ…？

「本当のところ、私が最初に春樹さんに言い寄ったのは別の理由があるんです」

「別の？」

「春休み前のこと憶えてますか？」

春休み前といえば、僕の浮わついた心を強烈な蹴りで撃ち抜かれたあの日が一番記憶に残っている。

「トコちゃんがとちって、春樹さんに告白するのを失敗した日」

そういえばそんな弁明してたな、冴草は。

「それで、春休みの間ずっと『もうだめだー』とか『おわりだー』とかっていじけてたんです。慰めるの大変だったんですから」

あの強気な冴草がねえ。それはちよつと興味深い。

「新年度になって、トコちゃんと春樹さんと同じクラスになったまでは良かったんですけど…。まあ、あんなことがあったわけですから、当然春樹さんの態度は冷たいわけですよ」

納得できない理由で蹴り飛ばされた。当然の対応だ。

「ますますトコちゃんは落ち込んでしまつて…。リベンジする気も無くしてしまつていたんです」

あれで落ち込んでいたのか？

「そこで私の出番です！」

「つまり？」

「トコちゃんをもう一度告白せざるを得ない状況に陥れるということです」

「それが赤松さんが言い寄ってきた理由か」

「トコちゃんのためだったとはいえ、春樹さん利用してしまったことは申し訳ないです」

「はは、すっかり騙されたよ」

つまり赤松さんにそんな感情は無かったということだ。弄ばれた感はないけれど…。

「い、いえ！ でも私の告白は本当ですよ？ 最初はそんな理由でしたけど、今は…、その…、…今のこの気持ちに嘘は無いですから」
「ありがとう」

……………いや待て。

しみりしている場合じゃない。赤松さんの独白ですっかり隠れてしまったけど、赤松さんの話には妙に引っ掛かる部分があった。最初の方。

ちよつと巻き戻し。

『春樹さんは、私のことどう思ってますか？』

戻しすぎ。

『それで、春休みの間ずっと『もうだめだー』とか『おわりだー』とかっていじけてたんです。慰めるの大変だったんですから』

進みすぎ。

『やっぱり、トコちゃんには敵わなかったかなあ…』

そこだ！

その言い方じゃまるで僕が冴草に好意を抱いているみたいじゃないか！

いやまあ、好みの見た目ではあるんだけど。外見だけ！ そう！
外だけ！ 身体だ…！

って、あんまり言い過ぎるとある種の変質者にとらわれかねないのでこの辺で。

要約すると、性格の不一致？

「あの、赤松さん」

「『赤松さん』、か…。結局最後まで名前の方では呼んでもらえませんでした」

「あ…、ごめ…」

「いえ、いいんです。私は強引すぎたんです。それで春樹さんも引いちゃったんですね」

勢いに圧倒されなかった、と言えば嘘になる。でもそれは嫌だからとか、そんな意味じゃないのは確かだ。

「あ！」

赤松さんが振り返る。

「私が春樹さんにフラれた、という話はどうか内密に」

言いふらしたりするつもりはないけれど、一応尋ねてみる。

「どうして？」

すると赤松さんはニコリと笑顔を見せて言うのだ。

「私と春樹さんがベタベタして、ヤキモキしてるトコちゃんを見るのがうれしいからです！」

赤松さんに『ドS』属性が追加された瞬間だった。

「ぎ、疑問に思ってたんだけどさ、そんな状態で二人はどうして仲

良くできるの?」

ほぼ同時に互いが同じ異性に告白。宣戦布告とも思える行為だけど…。

「チャンスは平等に。私とトコちゃんの約束です」

そんな約束だけで?

「それに、恋愛と友情は別物ですよ?」

「う、うーん、分かるような分からないような」

まあ、当事者であって無いようなものだしな、僕は。

「ところでえー」

赤松さんが甘えるような口調で、僕に腕を絡ませる。

「な、なに?」

「この状態で帰ったらトコちゃんどんな顔すると思います?」

「どうも何も、さっきのチーム分けの時やったんじゃない?」

「ああ、そうでしたね。じゃあ…」

赤松さんは僕の正面に立って、両腕を広げてニコリと笑う。

「だっこ。…ってのはどうでしょう? できればお姫さまだっこで」

遊園地の衆目に晒されながら集合場所まで女の子をお姫さまだっ

こで抱えて歩いて行けと申すかこのおなごは!

いいですか?

僕には異常握力と言うものがありましてね、その気になれば鉄でもグニヤリですよ。普段はそれをセーブしてましてね、なんとか凡人、パンピー、人畜無害な……、とは言えないけど、普通に生活しているわけですよ。

人を抱えるというのは予想以上に大変なのですよ。疲れた所で変に力が入ってしまえば、抱えてるものがグニヤリと鳴るかプチユリと鳴るか、どんな音がするか分かったもんじゃないのでございますですよ。

それ以前に、足腰は凡人もしくはそれ以下。そっちが先にダメになっちゃうですよ。

「お分かり？」

「な、何がです？」

おっと、悪い癖だ。また思考だけで会話してるつもりになってたよ。まあ、思考が口から溢れ出るような、漫画とかアニメとかドラマとかである、そんな悪癖よりは随分とましだろうけどね。

「じゃあ、集合場所の近くでお姫さまだっこで！」

という赤松さんは随分楽しそうだ。

…ひょっとして自分がそうされたいだけなんじゃ…。

「本当は…」

赤松さんが何かを言いかける。

「…い、いえ、なんでもありません」

罪滅ぼしのつもりで、彼女の道楽に付き合うことにしよう。

第11話

僕らは集合場所に戻ってきた。

もちろん僕は赤松さんを抱えた状態。お姫さまだっこの状態でだ。少し距離を歩いての登場のため、周囲の好奇の目が恥ずかしかったのは言うまでもない。

赤松さんも、僕の腕の中で顔を伏せながら赤くなっていた。

彼女の提案だったのだけど、当人が恥ずかしがってちゃ話にならないんですけど。

ちなみに、お姫さまだっこをしている理由は、赤松さんが捻挫をしたから、ということにしておいた。

冴草をからかうためとは口が裂けても言えない。

「赤松さん、どうしたの？」

「つか、タイソンなにやってんだよ」

「ちよっと、足を挫いてしましまして…」

「というわけで僕がここまで運んできたんだ」

「赤松さん、だい……………」

「…………ふうん」

最後に冴草。

うん。凄く怖いね。

だけど、仕方ないというところもあるみたいで、表情が微妙。

「で、なんでお姫さまだっこなわけ？」

冴草の鋭い突っ込み。

わざわざだっこしなくても、おんぶでいいはずだもの。当然の疑問だよな。

「……………」

答えられるわけがない。冴草をからかうためだなんて。

「春樹さん、私はもう大丈夫ですから、降ろしてください」

きつと冴草の威圧感に耐えられなくなったのだろう。

僕は赤松さんをゆっくり降ろす。あくまで捻挫ということにしていることを忘れてはいけない。

「ゴホン…。おかしなハプニングもあったようだが、今一度チーム分けをする」

もはや恒例となったチーム分け。皆が竹串を引く。

で、いや、予想できた展開だけど、さっきのフリからだと気まずすぎる状況でして。

「タイソン、行くわよ!」

行っくってどこですか？

地獄ですか？　ごーとうーへええるううう！　でえすか？
やべ、また思考で噛んだ。

「地獄は遠慮したい…」

「地獄？　ああ、地底探検のライドがあったわね。あれ怖かったの？　面白いと思ったけど。あ、タイソンって閉所恐怖症とか？」

そういう意味じゃない。

かといって本音を漏らしても蹴り飛ばされるだけなのでやめておこう。

「で、冴草は何か乗りたいアトラクションあるのか？」

冴草がキョトンとした顔で僕を見る。

「な、なに？　なんか顔についてる？」

「う、ううん。そ、そうだったわ。遊園地だから乗り物に乗らないとね」

どうも様子がおかしい。

いつもの高圧さが無いと言っか、滑らかで無いと言っか。妙に歩き方がぎこちない。

ん…、そういえば男と女と歩く早さが違っつて言っしな。早く歩きすぎかな…。

でも、月子ちゃんも赤松さんも特に何も…。

…いや、あれはどちらかと言えば僕が引きずり回されてた感じだったな…。ちよつと情けない。

「冴草、疲れてるか？」

「え？　なんで？」

「いや、お前遊園地初めてだし、体力考えないでバカみたいに走り回ってたんじゃない——」

やべ、バカとか失言だったか。

瞬時に身構える。

条件反射の回路が繋がってしまったのが哀しい。

「だ、だだいじょうぶよ！ そんな心配、無用よ！」

口は不機嫌そうだが、蹴りはとんでこない。

それにしても、やっぱり冴草は何かおかしい。

調子が違うと言うか、勝手が違うと言うか。所詮この世は弱肉強食！ という問答無用感が全く無い。

これどうしたことが。

「冴草さっきから変じゃないか？」

「へ、変？ 私の何が変わって言うのよ！」

体を捻る動き。

………来る！

と、思ったけど片足をあげて構えた状態で冴草の動きが止まった。

「……スカートだし、人目があるし……」

うん、スカートは学校でも同じだね。他の生徒の目もあるよね。
こと同じはずなのになんで学校では蹴れるのよ。
助かったけど。

「と、とにかく行くわよ!」

いったいどこへ行くこうと言っただ君は。

「ほらあれ!」

「観覧車?」

「あれに乗って園内見渡して目ばしい乗り物見つけるのよ」

「あー、なるほど」

観覧車というのはどうしてこうもでかいものなのか。

『観覧』というくらいだから、まあよく見えるようにということころだろうけど、『車』ってなんなんだろう。車輪とか、わつかとか、車みたいにはしるわけでもないのに、観覧輪とかにしたらしいのに、でもそれだとやっぱり変か。

「というわけで、観覧車までやってきたわけだが…」

「なに言ってるのよ?」

「心のナレーションだ」

「ふーん。じゃあ、『だが…』の後は何が続くのよ」

「それはこれから起こること次第」

「あんたも暇ね…」

なんとも言え。

で、観覧車に乗ったわけだが。
今回音声はありません。

「高いわねえ。なんでこんなに高いのかしら」

椅子の上に乗っかって、冴草は外を見ている。まるで初めて電車に乗った子供が流れる景色に目を奪われるように。

要するにマナー違反な訳だけど。ここは個室だし咎める意味もない。

「これだけデカかったら高くなるんじゃないの」

「それもそうね」

「それで、目ぼしいアトラクションは見つかった？」

「うーん、微妙。心惹かれるのは大方乗っちゃったし」

相変わらず冴草は外を見たまま。

しかし、なんとという微妙なアングル。

膝について椅子に乗っかっている冴草だが、本人も言っていたように今日はスカート。決して短いというわけではないが、微妙に見える後ろのふとももが気になって仕方がない。

足フェチは陽太の専売特許なんだけど…。

感染^{うつ}ったか…。

「ねえ、タイソン」

「な、なななに？」

一瞬視線がばれたかと思ったが、冴草は外を見たままだ。

「なにそんなキョドってんのよ」
「べ、別に」

冴草がこちらを向いた。

「なんか変なこと考えてた？」

「な、にも？」

「個室だからって変なことしたら蹴り出すから」

蹴り出すということは、外に蹴り落とすという意味だろう。

そろそろ頂上に到達する位置なので、超人か、ラッキーマンか、九死に一生スペシャルとか、衝撃映像100連発とかの番組に出れる人じゃないと死ぬ。

「し、しないって」

命は惜しい。

「そう」

なぜか残念そうに冴草は呟いた。

えーっと？ 個人的な妄想分を多量に含んでいいのだとしたら。あれなのか？ 変なことをシテほしいと？ 据え膳喰わぬはなんたらってあれですか？

でもまだ。僕らの年齢的にRとかZとかの指定はあまりよろしくないわけで。「あんああん」的な展開はいけないし、かといって「オニチク（なぜか変換できない）」なのもよろしくないわけで。

せいぜいABCで言うところのAでストップミー！ モラトリアムな純情チックな程度ですよね？

「訊きたいんだけど」

「にゃ…、なんれすか？」

言い直したのに舌が回ってねえ！

「さよぽんと何かあった？」

「え？　なんで？」

「なんか、帰ってきたとき、仲、よさそうだったし…。その…、だつこ…、とか…」

様子が変だったのはその事を気にしてたからか。

赤松さん。貴女の目論みはものの見事にクリティカルヒットで大成功みたいです。

「なにもないって」

「そ、そう…。それならいいけど…」

いいのか。

「ねえ、タイソン」

「なに？」

だいぶ落ち着いてきたな、僕。

「キスしよっか」

…は？

「な、なに言つて…」

冴草がこちらに近づいてくる。

「真面目に言つてんのよ？」

「や、ちよっ！」

「こんなに可愛い娘とキスするのは嫌？」

ぐっ、まさかこいつ自分の容姿が僕好みだと気付いていたのか？！

「そ、そんなこと、な…い…」

までまでまで！

近い近い近い近い！

呼吸が当たる。

シャンプーのいいにおいがする。

後ろには逃げられない。

かといって横に避けるほどのスペースもない。

いかん！

嬉しいけどなんかダメだ！

つつか、昼にハンバーガー食べたよ！

あんたも食べたよね！

ちゅうなんかしたらケチャップとかマスタードとかの味がしそっ
だよ。

ファーストキスはレモン味とか夢想的幻想的ロマンティックな都
市伝説がブレイクアウトしちゃうよ！

「
……………」
「
……………」

まずい！

このままじゃホントに…。

これまでに無い大接近！

あ、愚息め…！

—ゴウン…！

「イタツ！」

「…鈍痛うつ！」

変な衝撃が僕らを襲い、唇じゃなくて頭がぶつかった。

「な、なんだ？」

いいところだったのに。

「止まってる」

冴草が呟いた。

すぐに放送が入ってきた。

『トラブルのため五分少々停止致します。ご乗車のお客様には大変
申し訳ありませんが、しばらくお待ちください』

僕と冴草は顔を見合わせた。

「故障か」

「…みたいね」

なんか、変な空気も何処へやら。すっかり冷めてしまった感じで。

「つつか、変なことしたら蹴り出すって言ったくせに、そっちら
仕掛けてくるとは予想外だった」

「…『タイソンが』したらよ。私はいいの」

なんという屁理屈。

そっいうのはされたくないからする牽制だろ、常識的に考えて。

「とりあえず、今は忘れて。あんな恥ずかしいの嫌」

「一方的だな…」

「いいから忘れなさいよ！ 蹴飛ばすわよ！」

忘れられるわけがないだろ！

思いつきり好みの女の子と接吻（と書くとなんかイヤラシイ）しかけたんだぞ！

「しつかり根深く記憶に刻まれてしまったよ！」

「ならー、頭を何回か蹴ればいいのかしらねー」

芥草の蹴りなんか何発も食らったらすぐに死んでしまいます。やめてください。コンクリの壁を砕く蹴りのように。

「わ、分かった！ 忘れるから！ もう刻み込まれた記憶の上にベニヤ板なりコンクリなり塗りたくって左官して、綺麗さっぱり抹消するから！」

「そ、そこまでしろとは言っていないでしょ！ す、少しくらい、憶えてなさいよ」

「どっちなんだよ！」

「も、もういいわ！ 一回蹴れば少しだけ消えるでしょ！」

芥草の靴の裏が再び僕の顔を踏んだ。

ええ、もちろん最後に見たのは決まっています。

あ、今日もあなたは白ー。

第12話

はっ！

「僕はいったい何を?!」

「何って、なにもしてないじゃない」

隣に座っていた冴草が涼しげな顔でアイスをなめながら答えた。
えっと…。

「何かあったっけ？」

冴草と行動を共にすることになった所までは憶えている。そのあと何かアトラクションに乗ったような気がするが、そうでないような気がする。

「な、なななな、何もないわよ?!」

何かあったと言わんばかりの動揺で冴草は答えた。

問い詰めてもいいのだが、まあ、相手が冴草だからやめておこう。
命が惜しい。

「なんか首が痛いんだけど…」

「ね、寝違えたんじゃない？」

そうなのか？

「そつえば何かひどく懐かしいものを見た気がするんだ。白い…、あれはなんだっけなあ」

「ああああああ！ 先生！ 竜崎先生！」

竜崎先生と言えば、竜崎晶先生か？
僕らの担任の。

「げっ！ なんで冴草と大村が！」

なんか、学校と口調が違うなあ。

「公私混同しないタイプなんだよ。ここじゃ先生生徒は関係ないね」

随分とやんちゃな口調だけど…。

「格好は……、趣味ですか？」

「う、うるさい！ これはこいつが！」

と、先生が指差したのは隣の背の高い男性。スラッとしたモデル並みのスタイルは思わずため息が出るほど。

「はじめまして。井守茜です。よろしくね！」

ん…？

「んん？？」

「勘違いすんなよ！ こいつは女だからな！」
「ああー、なるほど」

思わず納得してしまった。

「納得されるとなんか腹がたつ」

「恋人なんですか？」

冴草が訊ねた。

「こ、ここいびとじゃー」

「恋人でしょ、晶！」

この男にしてこの女あり。まさしくお似合いのカップルだ。一種の勘違いを除けば。

「な、なんだよ」

ニヤニヤしている冴草を見て、先生の顔がひきつる。

「いえいえ、末永くお幸せに！」

ああ、ご愁傷さまで、先生。きっとあなたがこの先冴草の上に立つことはないでしょう。合わせていうなら、僕の上にも立てないでしょう。そんな僕は冴草の上に立てないでしょう。シクシク。

背後を気にしながら去り行くアキちゃん。

本当に先生って、大変ですね。

「なあ、冴草」

「なに？」

「今からどうする？ 時間もあまり無いし、並んでる時間もないぞ」
「そうね。じゃあ…」

冴草がベンチから立ち上がった。が、間が悪かったようだ。

―ベチャ…

汚草の持っていたアイスが、恐面の、いかにもなお方の、黒いス
ーツに染みを作った。

「あ、すみません…」

「おい、嬢ちゃん、どうしてくれんのや。こいつのう、ごつつい高
いんやで？ ごめんで済むとおもっとんのか、ああ？」

あちゃあ、不味いことになったぞ。

あのー、警備員さん、そこにいますよね。助けてください。あ
ー、隠れないで。周りの皆さんも離れないで。もっと近くに寄って
いいんですよ。

いや、かわり合いになりたくないのはわかるけどね。ピンチな
んですよ。

ほら、いたいけなJKが。あ、言い方が変か、女子高生が怖いお
兄さんに絡まれているんです。

そこのお父さん、冷めきった家庭に父親の威厳を示すチャンスで
すよ。

そのバカップル、バカじゃないというのを周囲に知らしめるチ
ャンスですよ。あ、バカだったら割って入るのか。

「慰謝料、払ってもらおか。そうやな、お嬢ちゃん学生やし、十万
で手うつちやる」

「じゅ、十万?!」

なんか、どこかで見た展開が…。

「無理です!」

「簡単やろ？ お嬢ちゃんカワイイのう？」

恐面さんの手が冴草の髪を鋤く。

ああ、いかん、まずい。

冴草の背中にどす黒いオーラが漂い始めたぞ。早めに手を打たないと、大変なことになりそうだ。

「まあまあ、ここは落ち着いて。クリーニング代だけで済ませませんか？ 最近のクリーニングは綺麗になりますよ」

冴草を制すようにして立ち、恐面さんに提案する。

「なんや、坊主。この嬢ちゃんの彼氏か？ なんなら、彼女のために、二十万払ってくれへんか？」
なんか値上がりしてるんですが。

「別に彼氏じゃないけど、そんな大金、持ってません」

僕の小遣い嘗めんなよ！

「しゃあないな。ほんなら、お嬢ちゃん、ちょっと付き合ってもらおか」

恐面さんが冴草の腕を引っ張る。

冴草の足に力が入るのがわかる。踏ん張っている訳じゃないのは明白だ。

ああ、まずい。

このままじゃ恐面さんが…。

原因はこちらにあるから申し訳ないけれど、ちゃんと平穏な打開策を提示したんだ。あとから怒らないでくださいね。

「ちょっと待ちな！」

芥草の足が上がる寸前で先ほど別れたばかりの声が割り込んできた。

「竜崎せー」

「それ以上は言うな！ 素性がばれたら後々面倒だから」

「じゃあアキちゃん」

竜崎先生が傾く。

「ま、まあいい。ところであんた、うちのカワイイ舎弟達になんてことしてくれんだ？」

舎弟って…。

「確かに原因はこちらにあるが、この子らはちゃんと謝ったし、クリーニング代は出すって言ったんだ。それなのに、二十万出せだど？ 随分と高いクリーニング代じゃねえか。なんだ？ テメエのその汚ねえケツも一緒にクリーニングすんのか？ ああ、それじゃあ値がはっちまうよな。汚れがこびりついてるだろうしよ」

先生、大変口が悪いです。仮にも教師の肩書きを持つ方が、いったい何事ですか。

「このクソ女！」^{ママ}

「……………あ？」

先生の顔が歪む。

やばい、どちらにしろヤバイ空気だ。

むしろ冴草の時よりヤバイ空気を感じる。この人に任せて失敗だったのか…？ でも先生だし、生徒を導く存在だし、かわいいし、きつと大丈夫だよ、ね？

「おい、恐面。その面、今より醜くしてやろうか？」
大丈夫じゃない！

「よく動く口やないか！」

事は穏便にお願いしますよアキちゃん！

「いい度胸だ。恐面」

いや、先生。こんなところで騒ぎを起こしたら、素性を隠したところで意味がないと思うのですが。頭隠しても尻が隠れませんよ。というか、彼…いや、彼女さん止めてくださいよ！ なにニヤニヤしてるんですか。

睨み合う恐面さんと先生。

互いに相手の出方をうかがっているようだ。

「相手に動きを悟られないようにしてるのね！」

これバトルものじゃねーから！ 心燃えるような熱い展開とか期待してねーから。

「……………」
「……………」

流れる静寂。

シリアスな沈黙なんだろうけれど、残念ながらここは遊園地。状

況に不釣り合いな陽気なBGMで思わず口許がにやけてしまう。いや、むしろ苦笑いだなこれ。

「ふっ」

先に動いたのはアキちゃんだった。

「ぐっ！」

状況を追う前に言っておくッ！

ぼくは今アキちゃんのすごさをほんのちよっぴりだが体験した。い…いや…体験したというよりは全く理解を超えていたのだが…。あ…ありのまま、今起こった事を話すぜ！

『ぼくは二人が睨み合つてると思っていたら恐面さんが倒れていた』な…何を言っているのかわからねーと思うがぼくも何が起きたかわからなかった…。

頭がどうにかなりそうだった…。催眠術とか超スピードとかそんなチャチなもんじゃ断じてねえ。もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…。

「一体何が…、あつたの…？」

うん、これバトルものじゃねーから。

「大変！ 誰か、誰か居ませんか！？ この人急に倒れたんです！」

あからさまに声色を変えて人を呼ぶアキちゃん。はい、普通に女の子ですね。いいんですか、あなたはそれで。

何はともあれ、恐面さんを運んでいく係員さん。これでひとまず
は一件落着かな。

「落着じゃねーよ。お前ら、学校の外でも問題児なのか。しかも問題児同士デートとは世も末だな」

酷い言われようだ。この人本当に教師？

「でもさっきなんであの人倒れたんだろ？」

それには横でニヤついていた茜さんが答える。

「晶は剣の達人なの。相手を睨むだけで倒せるんだから。『凶刀の晶』と呼ばれて恐れられていたの」

所謂剣の達人だけが発することのできると言われている『剣気』というやつですか。カッてやったら落ち葉がバシッと破れるあれですね。わかります。

というかそれ以前になんですかその不良のような二つ名は。剣と言っても、剣道とかではないようですね。

「余計なこと言うなよ。教師生命がかかってんだから」

バレるとヤバイことなんですネ。

「まあいい。もうあんな輩に絡まれるんじゃないぞ。めんどくせーから」

そう言っアキちゃん一行は去っていった。

「冴草」

「何よ」

「ぼくの回りには変なのしか集まらないのかな」

「なによそれ」

「変な監獄に囚われた気分だ」

「タイソン自体変なもの」

「あー、なるほど」

類は友を呼ぶ。

第13話

「冴草！」

「な、なによタイソン。そんな大声出さなくても聞こえるわよ」

「僕と結婚してくれ！」

「…は、…え、ちょ…」

「僕は冴草と生涯を共にすると決めた！」

「な、なんで急に…」

「冴草…、いや、兎卵子！僕は全世界の誰よりもお前を愛している！」

「そ、そんなの、私だって…」

「大好き！」

—ガバツ！

「あ、れ？」

枕に抱きついていた。

「ゆ、夢…なの？」

部屋の窓を開けてみる。
朝だ。

「ねむ…」

というか、なんという夢を。いくらなんでもいろいろすっ飛ばして飛躍しすぎだよね。

「…」

今寝たら、夢の続き見れるかな…。

時計を見た。

学校に行く時間だった。二度寝する余裕はなさそう。

仕方がない。行きましようか。

学校についた。

なんというか、いつも賑やかな場所よね。低血圧気味の私としてはテンションの高い連中の意味がわからない。あれって高血圧なの？

「よお、冴草。なんかムスツとしてんな」

「あら、遅刻魔が珍しい」

「知るかよ。なんか早く目が覚めちまったんだ。おー、そうだ、珍しいと言えば、こいつ」

遅刻魔が後ろから誰かを引っ張り出してきた。

「おはよう冴草さん」

「……………」

「？」

「誰？」

まったく見覚えがないんだけど。

「だろっ？」

遅刻魔がけらけら笑いだした。

「やだなあ、僕だよ。片山陽太」

「え？　だって眼鏡」

「僕の判断基準は眼鏡なの…？　コンタクトに変えたんだ」

「へえ、今日は変な日ね」

「そういやタイソンは？　冴草は一緒じゃねーの？」

「なんで私が！」

「じゃあ赤松さんとじゃない？」

「おはようございます」

と、言ってるそばからさよぼんの登場。一人での登校みたい。ちよっと安心する。

「あれ、赤松さんも一人？」

「どうかしたんですか？」

「タイソンがまだ来てねえんだわ」

「春樹さんが？」

「おはよう…」

私達が話していると後ろから眠そうな、だるそうな、そんな珍しい聞き慣れた声がした。

「どうしたの、春樹？」

よくみれば衣服が汚れている。

「いや、ちょっと登校途中でトラブルに…」

「トラブル？」

「そう。噂通りに言うなら、悪の軍団の残党がね…」

「よく無事だったわね」

「まあ、今に始まったことじゃないし。ちょいと捻ってやった」

捻った、というのはあのタイソンのことだからそのままの意味だろう。

「ともかく無事でなによりです」

さよぽんの言う通りだ。だけど私の口からそんな言葉が出てこない。

「あ、そうだ冴草。ちょっといいか？」

「なによ」

「話があるんだ」

「??？」

そして連れてこられたのがこの屋上。
タイソンを蹴った屋上。

告白した屋上。

ある種の転機がおとずれる場所。

しかし、今回呼び出されたのは私。

これがどういう意味なのか。嫌が応でも期待が高まる。
以前とは真逆の立ち位置に、私はいる。

「僕は決めた」

そんな中、タイソンは裏返ってない声で話し始めた。

「冴草の告白に『YES』で答える」

「は……え、っと、つまり？」

「僕と付き合ってくれ」

「……………ほ、ほんとに？」

タイソンは頷いた。

「私でいいの？」

「もちろん!」

「で、でもさよぼんは…」

「断った」

「いつ？」

「遊園地で」

「う、うそ…」

「本当だ」

「だ、だってさよぼんもあんたも、そんな素振り一度だって…」

「赤松さんの意向だよ」

「わ、でも私、そんなの…」

「呟草」

「こ、こんなの夢よ。朝の夢の続きを見てるに決まってる！ だって遅刻魔が遅刻してないし、エロ眼鏡が眼鏡じゃなくなってるし、さよぼんはタイソンにフラれてるし！」

「夢…？」

「夢よ！ 夢ゆめユメ！ 第一にタイソンもどという心境の変化！？ あんなに私のこと嫌ってたじゃない！」

「嫌ってなんかないよ。…ん、でもそれに似たものはあったかもしれないね。だけど、そんなこと今となっては些細な問題さ。僕は呟草を選んだ。ただそれだけのことだよ」

タイソンがそう言うってくれて嬉しいけど、なんだか寂しい。
どうして？

きつと今までみたいな微妙な関係が無くなってしまうのが嫌なんだ。本当の彼女彼女になったらきつと周りの扱いも、見方も変わってくる。それが不安なんだ。

「なにか問題がある？」

「う、うん」

「じゃあ言ってみて」

「えっと、タイソンは私のこと、す、…好き、なの？」

「容姿はバツチり好みだけど、はつきり言つと今は分からない。まあ、最初の印象があれだからねえ……」

タイソンを蹴飛ばした日のことを思い出す。

もし、あの告白がうまくいっていたら、私たちはどんな風に接していたのだろう。

「だけどそれでよかったと思う」

「ど、どうしてよ」

「もし仮に一番最初の出会いで僕が冴草の告白を受けていたら、間違はなくオーケーだったろうし」

「どうということ？」

「まあ、悪い部分、というか本性を知った上で冴草にオーケーを出せる今とは違った結末になったろうからね」

「あ……」

そういうパターンもあり得たんだ。最悪の事態というパターン。

「それで、どうなの？ 僕のこの返答に関して、冴草の反応は」

「も、もちろん……」

告白したのは私だし。

答えは決まってる。

「い、いいに決まってるでしょ……」

第13話（後書き）

え、短い？

このお話はフリーダムに行くからいいのぜ！

とか言っても真面目に行くんだろっなあ…（↑遠い目）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4627j/>

学園変獄

2011年10月6日03時49分発行